主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	秋元　孝文

主 論 文 題 名：『ドルと紙幣のアメリカ文学ー貨幣制度と物語の共振』

（内容の要旨）

本研究は、紙幣と文学作品が、ともに紙を媒体とした印刷物であり、読まれた時に初めて意味を発生するテクストであり、物質的価値を持たないフィクションであるという類似点から、同時代の両者の間にはその想像力において何かしらパラレルな関係を見出せるはずである、という仮定のもと、アメリカ文学を通時的に見て、紙幣デザインや発行主体、貨幣の本位などの考察をもとに文学作品を解釈するものである。

アメリカ文学の父であるベンジャミン・フランクリンは若かりし日に印刷屋として植民地紙幣や大陸通貨(Continental Currency)をデザインし、印刷し、かつその図版の解釈まで自らが所有する新聞に掲載していた。アメリカ文学の起源とアメリカ紙幣の起源がともにフランクリンに求めうるという事実は、アメリカにおいて紙幣と文学の親和性が極めて高いということを暗示している。

アメリカは西洋世界において初めて公共の政府によって紙幣が発行された場所であり、その建国以前から紙幣が利用されていたが、アメリカの歴史において紙幣の発行主体や信用度は目まぐるしく変化する。独立戦争時には大陸通貨が発行されるが甚大なインフレを起こし、独立と同時に発行が停止され、その後南北戦争時まで国としての紙幣は発行されない。代わりに各地の州法銀行がそれぞれ独自の銀行券を発行し、偽札も横行、紙幣の価値は現代の我々には想像もできないほど不確かなものであった。南北戦争時にグリーンバックと呼ばれる不換紙幣が発行され、これ以降、州法銀行券は課税によって締め出され、以前のような混沌とした貨幣環境ではなくなるが、この段階でも国法銀行(National bank)券や、様々な金証券、銀証券が発行されており、紙幣の国家的統一はされていなかった。19 世紀末には、建国以来金銀複本位制であった貨幣の本位が、73 年にあまり注目をされぬままに銀が廃貨されていたことを巡り、大統領選の論点となる。ようやく合衆国に連邦準備制ができて、中央銀行制度による貨幣の統一がなされるのは 1913 年のことである。

このような数々の変遷を経てきたアメリカの紙幣には、美しいデザインのものが多いばかりか、テクストとして「読む」ことの誘惑を投げかけてくるものが多い。例えば 1863 年に発行された国法銀行券は、各額面の紙幣の裏面にそれぞれアメリカ史に置ける重大な場面が描かれているが、そこには当時の歴史認識が現在と異なることが確認されるし、1896 年発行の銀証券(silver certificate) 1 ドル紙幣には、建国の理念を描く憲法に合衆国の指針を求める歴史意識が描かれると同時に、紙幣の周縁に配置された政治家たちに並んで、Emerson, Cooper, Hawthorne, Longfellow といった作家たちの名前が配置されている事実には、作家が、現在とは比較にならないほど国の正史に貢献した重要人物として認識されていたことが読み取れると同時に、アメリカ文学史がこのような意外な場所においても形成されていたことが読み取れる。

こうして得られた文学作品と紙幣の親和性を手掛かりに、続く９つの各章でアメリカ文学作品（第１章はアート作品）を取り上げて紙幣との関わりから論じている。以下に、各章の内容について概要をまとめる。

・第１章　J.S.G. Boggs について－紙幣と文学の比較研究のために

紙幣と文学を橋渡しする助走として、アメリカで 1980 年代から活躍した紙幣アーティストである J. S. G. Boggs を取り上げ、紙幣によく似たアート作品との比較から、紙幣というメディアの持つ特異性について論じる。

Boggs は紙幣と同サイズでデザインを精巧にコピーした手書きの作品を作り、それを実際に貨幣のように支払いで使うことによって「取引き」という貨幣のはたらきまでも作品に取り込む。そして取引きを繰り返すことによって、元はと言えばただの紙に書かれた絵に過ぎなかった Boggs 作品はバブル式に価値を高めていく。本研究では、ジンメルの貨幣論を参照して、価値とは客体の中に存在するのではなく客体に投げかける主体の欲望によって生まれるものだ、というジンメルの価値論が、Boggs 作品の価値が高騰する仕組みを解説しうるものだと指摘し、そこから鑑賞者の解釈行為によって初めて意味や価値を創出するものとしてコンセプチュアル・アートの祖であるマルセル・デュシャンの *Fountain* と、文学作品においても読む行為があって初めて作品が意味や価値を持つと論じた Iser や Jauss らの読者反応論批評を導き、紙幣も同じように読んで初めて意味や価値が生まれるテクストであることを指摘する。この事実も Boggs 作品が明らかにするところである。Boggs 紙幣はホンモノの紙幣と同寸同デザインであっても、手書きで、そして至る箇所にホンモノからの変更が加えられているため、手にした者はそれをまじまじと凝視し「読む」ことになるし、Project Pittsburg の中の一作品は、ホンモノの紙幣と全く別の建物をモチーフにしているにも関わらず、構図と画風が似ているために、真贋を見分けるためにはホンモノの連邦準備券が何の建物をモチーフとしていたか記憶していなくてはならず、リテラシーの有無が試されることになる。ここで Boggs 作品が偽物かホンモノか、ということを考えるとき、Boggs 紙幣はホンモノの紙幣の似姿をとっているとはいえ、アート作品としてはホンモノであり、その事実が逆照射するのは、ホンモノの紙幣が、アート作品としてはオリジナルを欠いたコピーとしてしか存在し得ないという事実である。同じように印刷技術によって作られる文学作品も、オリジナルはなく、全てコピーとしてしか存在し得ず、ヴァルター・ベンヤミンが複製技術によって芸術作品から消失する「聖なる一回性」を指した「アウラ」が、文学と紙幣からはともにあらかじめ失われていたことがわかる。こうして、本章では Boggs 作品を梃子にしつつ、紙幣と文学の共通する性質を抽出し、両者を同時代が生んだフィクションとして併置することの妥当性が主張される。

・第２章　複製への抵抗－バートルビーと貨幣、そして解釈

Herman Melville の短編 “Bartleby, the Scrivener: a Story of Wall-Street”（1853）を、貨幣のはたらきと重ね合わせながら、複製への抵抗として読む。バートルビーの決まり文句 “I would prefer not to” は相手からの問いかけへの返答として作品の中で繰り返され

る。不定詞の to の後に来る動詞は問いかけた者の発話に委ねられるために、問いかけてしまった以上バートルビーに論理的、理性的に勝つことはできない。しかし、作品の中で唯一彼が返答としてではなく自分からの発話として“prefer”を使う場面があり、そこは事務所の同僚たちに“prefer”が伝染していくというある種コミカルな場面なのだが、バートルビーはここで“I'd prefer to be left alone here”と自ら発話し、あたかも「意志の無」の穴蔵から這い出して来たかのようなバートルビーは、ここで自分のオリジナルな言葉である prefer が濫りに複製されることに怒りを表明しているかのようである。語り手の法律事務所所長が、慈善を謳いながらも、その実経済のロジックに忠実であり、一方でバートルビーは多寡で図れる物差しである経済のロジックの埒外にあることを確認した上で、ことばと貨幣がともに自分だけのオリジナルを持ち得ない複製であることから、バートルビー出版当時の混沌とした貨幣状況を考察する。大量の偽札が出回った当時、紙幣の真贋は Counterfeit Detector や Bank Note Reporter といった印刷物によって確認されたが、この印刷物自体が偽造可能である以上、真正性はどこまでいっても担保され得ない。作中でさりげなく触れられるだけのモンロー・エドワーズという実在の偽造家の詐欺事件にも見られるように、外部に信用を偽造していくことで偽物もホンモノになり、その様子は 19 世紀に見られた fantasy note と呼ばれる、発行記録がないのにホンモノとして流通していた紙幣同様で、一度貨幣として通用してしまえばホンモノではない貨幣であっても、貨幣として通用していることを根拠に貨幣となりうる。貨幣自体が、奇跡的にも、価値があることと貨幣であることの「永遠の循環論法」の上に成り立っているが、この循環論法の円環を閉じるのは容易ではない。バートルビーは書類の確認を拒否し、複製に抵抗しながらも、最終的には「バートルビー」というテクストとして複製されているために、彼の複製への抵抗は失敗に終わったかのように見える。しかし、語り手がバートルビーを理解し、語ることに失敗している様からわかるのは、バートルビーがむしろ抵抗そのものとなっていることであり、作品内の語り手とバートルビーの構造を読者と「バートルビー」というテクスト外の構造に敷衍すれば、語り手同様読者も「バートルビー」というテクストに問いかけながら、満足な回答を得られず“I would prefer not to”という声ばかりを聞くことになり、分析家の立場にあった語り手がバートルビーによって逆に語らされているように、作品を分析せんとした読者もまた「バートルビー」というテクストによって分析され、語らされることとなるのである。

・第３章　『ボロ着のディック』の見た目（アピアランス）／出現－読むこと、読まれることと社会的上昇

Horatio Alger の手による 19 世紀中頃のアメリカを代表する児童小説 *Ragged Dick*（1868）は、貧しい生まれの主人公が努力・勤勉・節制を通じて上昇し、立身出世していく様子を描いた物語として知られている。しかし、リテラシーをキーワードに、作中ではディックが様々なものを読んだり読めなかったり、あるいは彼自身がいかに読まれるかが変容していく様子を考察すると、作品がテクストの表面上で唱導していることとテクストが実際に言ってしまっていることの間には齟齬が見られることがわかる。ディックは物語の序盤においては文字の読み書き能力を持たず、自分で売っている新聞に何が書いてあるのかもわからない。同様にディックは紙幣に関するリテラシーも持たず、騙されて真札を偽札扱いされて騙し取られそうになっている。各地の銀行が自由に紙幣

を発行し、総数 1 万種類近くの紙幣が流通していた 19 世紀半ばのアメリカで、やりとりされる紙幣が真札かどうかを見抜くには経験に基づいたリテラシーが必要だったが、ディックにはそのリテラシーがない。その一方で路上生活の経験を通してディックは都市のリテラシーを持ち、交通を読み詐欺師の心理を読み、逆にやり込めてみせる。ディックは友人を家庭教師として得、読み書き能力を身につけ、努力、勤勉、節制によって出世していくように見えるが、実はディックの上昇に先んじていたのはディックの見た目の上昇であり、それは生来の顔の良さと人からもらったスーツによるもので、ディック自身の努力とは関係がない。19 世紀中頃に都市化が進むアメリカで若者への指南本が警戒を促していたのは、都会につきものの詐欺師たちに騙されないようにということであり、詐欺師は外見を変えることで田舎者の信用を勝ち取った。してみるとディックがしている、外見の良さで人の信頼を勝ちとる、という行為は、この詐欺師たちと意図こそ違えど構造は同じであり、さらには当時の偽札が銀行の発行地（出自）や額面（階級）を偽ったのとも同じ仕組みをディックはしていることになる。最終的にディックの出世は溺れている子供を助けるという偶然の出来事によるものであり、このような御都合主義的な結末を用意しなくてはならなかったことからも、努力、勤勉、節制だけでは上昇は見込めず、むしろ目に見える一時的な情報を書き換えて、自身が「高く」読まれるようになることの方が出世の近道であることを、本作はテクストの背後で雄弁に語っている。

・第 4 章　トウェインの書いたグラントのサイン－「どちらが夢か？」とサイン・主体・金銀複本位制

Mark Twain が書いた未完の短編 “Which was the Dream?”は夢をめぐる物語であるが、この作品の中にはいたるところに二重性が張り巡らされている。主人公の X 少将が第 18 代大統領ユリシーズ・グラントをモデルにしていると同時に、その少将の友人として登場する人物にも明らかにグラントを思わす特徴が付与されている。少将はジェフ・セジュウィックという部下に仕事を任せた結果、ジェフにその筆跡をコピーされ、自分のダブルであることを許してしまうばかりか、自分であることを乗っ取られてしまう。ここでは本来は主体に従属して主体と一対一で対応してその同一性を保証するはずのサインが、逆に自身が真正であることを根拠に、主体を従属させてそこから真正性を奪っている。このように主体とそれを代理表象する記号の関係の逆転、そして本来一対一で対応するはずの主体と記号の関係が記号の複数性によって揺るがされている様子は、この作品が執筆されていた当時のアメリカの最大の政治的イシューである、金本位制と金銀複本位制をめぐる議論を思い起こさせる。1896 年に共和党のマッキンリーと民主党のブライアンの間で争われた大統領選の争点は、貨幣の本位が金であるべきか、金と銀の双方であるべきかであった。73 年に銀が廃貨されたことを陰謀論的に振り返る風潮は 1894 年に出版された当時のベストセラー、*Coin's Financial School* にも見られる。作品で少将とセジュウィックが同じサインという記号で少将であることの地位を争っているのと同様に、当時の貨幣論争では金と銀という二つの価値物が、貨幣という地位に就くべくその正当性を争っており、両者は同じ構造を提示している。のみならず、サインの偽造ということでいえば、トウェインは自分の作品の中でもホーラス・グリーリーの悪筆を偽

造して内容も別物の手紙を偽造するという、セジュウィックと同じことをやっている。そのセジュウィックのモデルとなった人物を考えるとき、グラントを破産に追い込んだファーディナンド・ワードや、グラントの腹心の部下でありながらグラントからグラントその人であることの価値を奪おうとしたアダム・バドーもいれば、トウェインから利益や権利を奪ったチャールズ・ウェブスターであるとも言え、トウェインとグラントの晩年は奇妙に似ている。と同時に、両者がモデルとなるとき少将はトウェインであり、同時にグラントであり、つまりはトウェイン＝グラントとなるのであり、自分が他ならぬトウェインであることの価値に意識的だったトウェインと、自分が他ならぬグラントであることの価値を最後に回想録で換金したグラントが、判別がつかないほど混ぜ合わされているX少佐というキャラクターは、いわば「トウェインが書いたグラントのサイン」であり、個人の独自性が商品になるという資本主義の一側面のあやうさを示しているともいえる。作品内のレトリックとしては「AとBのうちどちらがXか？」という二者択一式の疑問に対して、いずれも明確な答えを出せないようになっており、強いて言うなら「AもBもどちらもXである」という答えしか出せず、金も銀も貨幣であるように、Xと一対一で対応するなにかがあるはずだという思想はこの作品では徹底的にはぐらかされているのである。

・第５章　紙の上のエメラルド・シティー『オズの魔法使い』と紙幣制度

Frank Baum の *The Wonderful Wizard of Oz*（1900）について、19 世紀末の金本位制と金銀複本位制をめぐる争いのアレゴリーとする読みが Henry Littlefield 以来存在する。作品には確かに金や銀が頻繁に登場し、Littlefield の議論とは美しく一致するのではあるが、そう言った批評はそこから作者ボーム自身の貨幣問題に対する立場がどうであったかということに論点を持っていきがちである。しかし作者の意図より重要なのは作品がいかに読めるかを進化させることであろう。この章では金銀に加えてもう一つ頻出する色であるグリーンに注目する。グリーンは南北戦争時に発行された不換紙幣 greenback を思わせると同時に全ての紙幣的な働きをも想起させる。エメラルド・シティではすべてのものが緑に見えるが、それは緑のメガネをかけているからであり、オズが自らを呼ぶ humbug という呼称が、かつて金貨支持者に対する紙幣論者への揶揄として使われていたように、オズとエメラルド・シティには紙幣的な含意が読み込める。オズはドロシーたち一行の願いを叶えないのに、叶えた気にさせる。それは「ふりをしている」と同時に「信じ込ませる」行為である。ボームはオズ以前に緑のゴーグルを馬にかけさせるエピソードを書いており、本質と見た目の違いに意識的であった。1870 年代に不換紙幣に反対して書かれた *Robinson Crusoe's Money* では、何ものとも兌換できず法制によってのみ貨幣とされる不換紙幣の無効性が主張されるが、作中に添えられた Thomas Nast のイラストが勢い余って示しているのは、むしろ価値の表象であって実態を持つ何かの代理ではない、紙幣というメディアの特異性である。そして、『オズ』が出版された頃の紙幣のデザインを読んでわかるのは、それが電気や蒸気など目に見えない力を新たなエネルギーとして讃える様子であり、表面的には不可思議な現象を、実際には機械仕掛けの科学の力で引き起こしていたオズと同じはたらきを示している。エジソンが「メンロ・パークの魔術師」と呼ばれたように、科学と魔術が不可分だった当時の様子が読み取れる。それは、不信を停止してただの紙切れを価値物だと信じることとも、緑のメガネを

かけて全てが緑色に見える国とも仕組みを一にしている。のちに 1939 年に映画化された時、原作にあった様々な金や銀は姿を消し、緑のエメラルド・シティだけが残った。この間にアメリカの貨幣に起こった出来事といえば、1913 年の連邦準備制度の確立であり、それに伴う全国的に一元化された連邦準備券の発行である。1870 年代に David Wells が描く貨幣の適者生存においては、紙幣は金貨の前に敗れ去るとされたが、映画版『オズ』で生き残ったのがグリーンであるように、貨幣においても生き残ったのは紙幣だったといえよう。

・第 6 章　ジャック・ロンドン有限会社（カンパニー・リミテッド）－『暗殺局』における作者と資本主義

Jack London 著 *The Assassination Bureau, Ltd*（1963）は貨幣を媒介として暗殺を請け負う暗殺局という組織について書かれた小説で、そこにはニーチェの「超人思想」の影響や社会進化論、暗殺という題材など、非常にロンドンらしい要素が見られるにも関わらず、ロンドン研究においてはほぼ無視されている。その理由の一つは、この作品がロンドン一人の手によるものではないということであろう。ロンドンは肉体労働者的な時間制労働価値観のもと一日千語の執筆を自らに課していたが、作品プロットを考案するのは苦手であった。そしてこの作品は、そもそものプロットがロンドンの手によるものではなく、のちにアメリカ初のノーベル文学賞受賞者となるシンクレア・ルイスの発案によるものであった。ロンドンのファンであった作家志望のルイスはプロットの提供を持ちかけ、計三回の取引で 27 のプロットをロンドンに売っている。さらには、ロンドン自身はルイスのプロットに基づいて作品を書き進めたものの、これを完成させることができないまま 40 歳の若さで亡くなってしまう。その未完の作品に結末をつけたのはミステリー作家のロバート・L・フィッシュであり、『暗殺局』はロンドン一人ではなく、3 人の作家の手によって作られた作品で、それゆえロンドン研究にとって扱いが難しいのである。しかしロンドン自身が意識していたように資本主義社会における出版の世界で重用されるのは作品の価値そのものよりも作者の名声であり、この作品が現在出版されているのもそれがジャック・ロンドンという作者名を冠しているからである。そして、ルイスがプロットを考案する際に「ジャック・ロンドンらしさ」を念頭においていたことからもわかるように、ある作家らしさというのは自然人であるその人だけに作れるとは限らず、また、フィッシュがつけた結末にポーとメルヴィルの影響が透けて見えるように、この作品はあらゆるテクストが必然的に持つ間テクスト性や共時性を可視化しただけのようにも思える。そして自然人から離れてむしろ機能としての作者を考えるとき、ロンドンが活躍していた 19 世紀末のアメリカで「法人」という人ならぬものが人扱いされるようになったことが思い起こされる。アウエルバックも指摘するように、トレード・マークとしてのジャック・ロンドンの確立に邁進したロンドンは、自然人というよりむしろ企業体のようであり、作品表題に付された Ltd.が暗示しているのはこの作品自体が企業的なものだという事実である。そしてロンドン一人の手によるものではないゆえにロンドン研究の周縁に位置するこの作品は、逆説的にジャック・ロンドンらしいジャック・ロンドンのあり方を実践している作品だということができるのである。

・第 7 章　広告に似る男－『グレート・ギャツビー』と時間と貨幣

主　論　文　要　旨

F. Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* で、デイジーがギャツビーに対して発する「あなたは広告に似ている」という奇妙なもの言いを出発点に、ギャツビーと同時代の経済との関わりを考察する。ギャツビーはベンジャミン・フランクリン的なセルフメイドマンであり、その自己鍛錬にフランクリンの『自伝』に表された「十三徳」の影響が見られることはよく指摘される。ところがフランクリンとギャツビーは経済観においては正反対で、マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』でフランクリンの「吝嗇の哲学」から議論を始めたように、フランクリンの説く財政とは自己目的的に貨幣を獲得することであり、一方でギャツビーはヴェーバーとは逆の見地から資本主義の成り立ちを説明したゾンバルトの「恋愛と贅沢」を地で行くように思える。1920 年代のアメリカの経済を考えるとき、自動車産業ではフォードが凋落して GM が台頭したことがこの時代を象徴するが、GM 台頭が表すものは必要を超越した消費主義であると同時に、分割払いという未来を前借りして時間を貨幣に換える行為でもある。獲得した貨幣を「過去を取り戻す」ために散財するギャツビーは、同じように時間と金の交換可能性に基づいて、金を時間に交換しようとしているのである。GM は自動車にモデルチェンジの概念を持ち込んだ。モデルチェンジとは連続している時間を人工的に区切って過去と現在に分けることで、過去を「時代遅れ」として古びさせ、現在の価値を相対的に高める行為である。そしてそのモデルチェンジを媒介したのは広告であった。ここにギャツビーが「広告に似ている」所以が読み取れる。彼はかつての自分を旧モデルとして捨て去り新しい自分を作り出した、モデルチェンジの人である。フランクリン的に見えたギャツビーの自己鍛錬が「キャラクター」ではなく、外見的で可変の「パーソナリティー」を主眼としていることにも、それがモデルチェンジであることは読み取れる。しかしモデルチェンジを繰り返し続けて常に最新型であることは困難であり、モードの流れに追い越されてしまったギャツビーは時代遅れとなって、命を落とすことになる。紙幣に目を向けると、1935 年から 1 ドル紙幣の裏面には今でも残る all-seeing eye が描かれることになり、ギャツビー以後の紙幣は人間より高次な神の目が見張るものとなった。ギャツビーはウィルソンがそこに神の目を見たエクルバーグ博士の看板の目に気づかない。それは彼が人間たちの視線の世界にしか生きていないからであり、それより高次な法や秩序を体現する眼差しの世界には生きていない。だからこそ彼が時代に取り残されて命を落とすのは必然だったのである。

・第８章　ウィリアム・バロウズは地域通貨の夢を見るか？－紙幣に見るアメリカのグローバリゼーションとオルタナティヴ

　カンザス州ローレンスの地域通貨リアル・ダラーには William Burroughs の肖像が載っている。現在の連邦準備券に到るまでアメリカの紙幣に肖像が載るのは国家の建設に貢献した政治家であるのが常であり、麻薬中毒で同性愛者のバロウズが載るのはふさわしくないように思えるが、これが地域通貨という、法定通貨ドルに対するオルタナティヴであることを考えるなら、むしろバロウズの肖像はふさわしく思えてくる。アメリカの紙幣の始まりには、植民地紙幣に独自の偽札防止法を施し、大陸紙幣をデザインして自分の新聞でその解釈を披露し、印刷屋として両紙幣をつくったベンジャミン・フランクリンがいる。フランクリンはこうして実際に紙幣を作ったのみならず、『自伝』によ

ってアメリカ的なセルフメイドマン像を確立し、時間を養分として増殖していく現代の資本主義的な貨幣観を定着させた。しかしフランクリン的な増殖する貨幣およびそれに基づく資本主義というシステムがすでに世界に歪みを起こし、グローバリゼーションの名の下に世界的な富の不均衡を生じさせている事実は、21 世紀を迎えてますます顕在化してきている。そして、市場の原理のみで移動し、増殖し、共同体の外に富を流出させてしまうドルに対して、共同体の中に留まるのが地域通貨であり、リアル・ダラーもそうした試みの一つである。バロウズはその著作において、麻薬が時間を食い物にして欲求を育て、ジャンキーへの支配を強化していくことを指摘するのみならず、そのはたらきを貨幣のはたらきと重ねてみせる。バロウズがこだわった主題に、言語は人間を宿主としてそこに巣食うウィルスであるという「言語ウィルス説」があるが、このウィルスというメタファーに、人間の経済活動の道具というよりは、むしろそれを宿主として逆に支配し、グローバル化した世界を食いものに自己増殖していく資本としての貨幣を重ねることは容易である。だからこそ『ノヴァ急報』で「紙幣のために盗んだ緑を返せ」とあるように、バロウズにおいて時間、金、麻薬が重ね合わされているのも不思議ではない。そして現在の体制に対するオルタナティヴの姿勢を打ち出したバロウズゆえ、彼の肖像が、グローバリゼーションを加速するドルではなく、それに対するオルタナティヴである地域通貨に掲げられているのは、その精神を体現しており、ふさわしいのである。

・第 9 章　（E）X Marks the Spot－ポール・オースター『ブルックリン・フォリーズ』と 9. 11 後のリアリティ

Paul Auster の 2006 年の作品、*Brooklyn Follies* は 9.11 によって締めくくられ、46 分後に訪れる WTC への旅客機の激突によって不可避的に変容してしまうアメリカの現実の最後の瞬間を描く形になっている。そのリアリティの変容とともに本作で中心的なテーマとされるのがリアルとフェイク、作品と作者、複製と真正性といった真贋をめぐる問題意識である。かつてアレック・スミスという画家の死後にその贋作の販売に手を染めていたハリー・ブライトマンは、今度はホーソーンの『緋文字』の「税関」の原稿偽造を計画する。この二つの贋作作成は似て非なるものである。絵画の贋作はサインさえ入れなければ贋作ではなく、そこでコピーされるのは作家の「作風」である。一方原稿の偽造でコピーされるのは「作風」ではない。印刷されたコピーでしか存在しない書物のオリジナルな原稿を発見したことにするのである。しかもその偽造される作品が「税関」であることにはさらに複雑な意味が生まれる。なぜならこの税関の章は、ホーソーンが、そこに続く物語の出どころが自分ではなく、発見した原稿なのだと、フィクションの創造主としての自分の地位を放棄している文章であるからだ。その原稿を偽造してホーソーンの手によるものだとすることは、作者と真正性をめぐる矛盾を内包することになる。それはあたかも機能にのみ還元される「作者」像へのオースターの復讐のようである。しかし、この作品はそういった贋作の問題を前景化させながらも、最終的にも事実であろうがフィクションであろうが、重要なのは物語の力であると主張している。そして、ニューヨーク公共図書館のバーグコレクションに残されたオースターの原稿からわかるのは、この作品のアイディアが 2001 年の 9.11 以前から構想されていたという

事実である。そして 2004 年に書かれたオースターによるジョージ・W・ブッシュ批判が本作でも繰り返されている様子からは、9.11 がなければこの作品がかかれなかったであろうこともわかる。9.11 後に作られた、ジョージ・W・ブッシュの肖像を載せたジョーク紙幣 Deception Dollar から読み取れるのは、WTC に旅客機が激突するという未曾有のテロを前にして、公式に伝えられるリアリティの背後に陰謀論的な別のリアリティを読み取ろうとする姿勢である。9.11 以降アメリカのリアリティは変容した。天気予報のようにテロの危険度を示す国土安全保障勧告システムに見られるように、原因や根拠が明示されないまま警告が提示され、アメリカのリアリティは根拠と事象の結びつきを不透明なものに変えてしまった。だからこそ作中で繰り返される “X Marks the Spot” という言い方は別の読み方ができ、この物語は 9.11 を境に ex(過去)になってしまったかつてのリアリティへの、そしてそこに存在していた、いまは失われてしまった物語の力への憧憬として読むことができるのである。

以上、９つの各論を本体とした上で、最後の「おわりに」では、本研究において白人男性作家のみが取り上げられ、女性や人種的マイノリティが扱われていないことを、アメリカ紙幣に掲げられる肖像じたいが白人男性のみによって占められてきた事実と重ねる。2020 年に、アンドルー・ジャクソンに取って代わり、奴隷解放に尽力し地下鉄道の活動に関わった黒人女性ハリエット・タブマンが 20 ドル札に載ることによって、アメリカ紙幣には多様化がもたらされる予定なのだが、トランプ政権はその変更を棚上げにしようとしており、この問題が、いまの保守化したアメリカが建国の理念を堅持しうるかの試金石であり、紙幣を読むことがアメリカやアメリカ文学を理解するために、現在でも有効であることを指摘した。

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	□ "KOU" □ "OTSU" No. *Office use only	Name:	Takafumi Akimoto

Title of Thesis:

American Fiction and Changes in the American Currency System

Summary of Thesis:

The idea that is shared through all the chapters of this paper is the assumption that paper currency and literary works have a lot in common as fictional texts that don't have intrinsic value in themselves but are believed to have some thanks to a shared illusion, and produce meaning and value only when read properly. The United States is the first Western country that had paper money issued by the public government, and paper currency itself has seen various kinds of changes in its history: size, design, the issuer, and what is used to back the money. The fact that a father of American Literature, Benjamin Franklin, who originated the idea of a typical American self-made man, is also responsible for designing, printing and interpreting several forms of paper currency is another piece of evidence of how closely these two media resemble each other in America.

Based on this assumption, my research investigates the parallel relationship between literary works and contemporary paper currency through the close reading of one artist and eight works of American literature. The first chapter deals with J.S.G. Boggs, a money artist who produces minutely hand-drawn copies of genuine paper money and actually uses them. What the comparison between Boggs' works and genuine paper money reveals is how paper money and literary works are more similar than we might expect them to be. The second chapter investigates through a discussion of how valueless paper can become money how Herman Melville's "Bartleby, the Scrivener" depicts Bartleby as a crystalized "resistance." Chapter 3 takes up Horatio Alger's famous juvenile *Ragged Dick*(1868) and argues that although the novel is often said to have instructed its contemporary young readers to rise from "rags to riches" through inner improvement, it is actually the protagonist's appearance that caused his success, and how he changed his appearance coincides with how his contemporary counterfeit banknotes altered their birthplace and denomination. Chapter 4 deals with Mark Twain's uncompleted short story "Which was the Dream?" and points out that the logic in this work where you cannot connect a subject and a single sign shares the contemporary logic of bimetallism in which both gold and silver can be used to back money, while Chapter 5 deals with *The Wonderful Wizard of* (1900) and argues that this story, which has often been interpreted as the allegory of bimetallism, is also an allegory of fiat money. The subject of Chapter 6 is Jack London's *The Assassination Bureau. Ltd.,* whose plot London bought from Sinclair Lewis and whose unfinished manuscript was posthumously completed by mystery writer Robert. L. Fish. Although this kind of collaboration by writers is unusual, this corporation style paradoxically embodies what Jack London is. Chapter 7 investigates how Gatsby, the protagonist of *The*

Thesis Abstract

No. 2

Great Gatsby, replays the logic of economic mode of the 1920s and Chapter 8 argues how appropriate it is to have William Burroughs on its face of REAL Dollar, a local currency in Kansas, if it is an alternative to legal currency which blindly supports globalism. Chapter 9 takes up Paul Auster's *Brooklyn Follies* and a joke note called a Deception Dollar in relation to 9.11 and discusses the change in American reality after the incident.

Through these 9 chapters, this paper reveals how paper money and literary works have shared a common imagination in American history.